私がなぜ現在の科目を選んだか

「病理学」

信州大学大学院医学研究科
臓器発生制御医学講座分子病理学分野
杉　浦　善　弥

私が病理を選んだのは，純粋に病理標本を見るのが好きだからです。

幼い頃から，物の形や色に興味，こだわりがありました。小学生時代には建築（特に古代建築）と人体解剖がマニア的に好きでした。都市や建築物の模型を自作したり，人体の臓器模型を粘土で自作したりしていました。変な子供ですね。でも，ちゃんと友達と野山を駆け回ったりもしていました。学校でも図工，幾何など図形的な科目が好きでした。

高校２年時に，学校の授業で分子生物学を学び，遺伝法則の美しさ，深遠さに感動し急遽進路を変更して生命科学を志しました。

信大に入学後は，３年生まで無気力で出席関係で呼び出されることも多かったのですが，４年前期に病理実習がありそこで顕微鏡の世界の面白さに目覚めました。まず眼で見て，多くの場合正常組織は美しく，病変は醜いです。正常組織もただ攻撃されているのではなく，炎症細胞という軍隊を派遣して癌細胞や細菌，カビなどに対して徹底抗戦します。時に炎症細胞が暴走して，美しい母国であるはずの正常組織を破壊することもあります。それらのドラマを見物するだけでも楽しいものでした。さらに，病理の教科書を単体で読んでも頭が痛くなるだけですが，標本を見た後に目的意識を持って読むと抵抗なく頭に入りました。そうやって教科書を読んだ後に再度標本を見ると，最初よりもっといろいろな所見が拾えました。こうした好循環が起こって加速度的に病理が好きになりました。

ついでにほかの科目まで好きになり，ほぼ講義に全出席するまでに変身しました。

卒後は２年間初期臨床研修を受け，その後神経内科に一時入りましたが，結局病理に転科しました。自分では病理に戻ってきたという感覚です。

私の場合は自分が最も興味を持ち安心して仕事ができる道を選んだら，それが病理だったのだと思います。幼い頃からの人生を振り返ると，極めて妥当な判断で病理は天職だと自分では思います。

現在は学内および諏訪赤十字病院にて，病理診断業務に携わっています。我々病理医は直接患者さんを診るわけではないのですが，病理診断は社会への貢献度の高い仕事だと自負しております。充実した見習い病理医生活を送っています。さらに大学院にも在学しており，糖鎖生物学と病理の関わりについて研究しております。

病理の守備範囲は全身の疾患から分子にわたり，とても広く，generalist 志向の方には特におすすめの分野だと考えます。

（信大平16年卒）

私がなぜ現在の科目を選んだか

「小児科」

信州大学医学部小児医学講座
大　野　　純

なぜ，小児科を選んだのか？それは子供の笑顔が大好きだから選んだのだと思います。映画パッチ・アダムスをみて，漠然と小児科医への憧れをもって医学部に入学しました。そして，学生実習での小児科の印象は，教授始め小児科のお医者さん達は，「どうしてこんなににこやかに笑顔を絶やさず，生き生きと仕事をしているのだろう？素敵だな～」という印象でした。しかし当時の私は小児科と他科とで悩み，決められませんでした。それは，自分の性分は内科系には向いていないじゃないか…外科系だろうと思っていたからです。初期研修では，はっきりと志望科を明確にしないまま県外の市中病院で２年間研修しました。研修中は患者さんをさまざまな科で担当させて頂く中，いろいろな科が魅力的に思えました。緩和ケア科では患者さんの希望を聞き出し QOL を大事に寄り添ってみられた笑顔，家族の介護疲れから入院を余儀なくされた寝たきりおじいちゃん達を元旦からにんまりとほほ笑みながらいつも通りラウンドする Dr.K の姿勢などローテート制度だからこそ学べたことでした。しかし，夜間救急外来で，診察時に泣きわめく子供が帰り際ににこっと笑ってバイバイする瞬間，一日の疲れがスーッと消えていく自分を感じることができたことが研修生活での一番の収穫であったのかもしれません。

以前，医師は生計を立てるためにお金を稼ぐ仕事というものではもちろんなく，一人前の医師になるためには人並み外れた努力と情熱なしではやっていけない職業だと教えて頂いたことがあります。それをやり抜いていくために不可欠なものは，打算抜きでその仕事が好きで，心からやりがいを感じることではないでしょうか？私にとって，それは『子供の笑顔』だと感じたのでこの科を選びました。小児科に進んで半年，一人前の医師への道程はまだまだですが，一歩ずつ楽しく近づいていけるよう精進します。

（信大平20年卒）